へ13
2947
31

序

源井

31
特
へ13
2947
31

宮内省

宮内庁

増歌の。誠と。雞卵の
四角。なれば。梅暮と
大隋も顯はす。謠人物
せ〳〵。其理を不究の

論。可恥の妄誕也
夫鳥いよ〳〵。木を撰ぶ
棲ぶも。木いよ〳〵鳥を
選ぶ。理つよ。善悪皆
遊戯の。鏡きをもつて

獨室閨。夜の鳥きを
聞く。天を御〳〵哇哇よ
均〳〵。天を汚〳〵
還て己が面を汚。老子の
不謂。その白を知〳〵

黒き
黒き
黒き

序二

○

前章は宝晋斎
真角が秀句ふ寄

うくひすや梅はさかれどふるうの枝と
ありふんいうう秀のふるきふまうふ
幾月ぞもさぶくふちぐけるきけん

○

後章は自玉庵
紙徳が名吟ふ寄

うくひすやあまりふ鳴てこがれむす
あざ〳〵ふんはきがとふくきふまうふ
幾月まの世かうけのふ拙ちぐ〳〵けん
せんのまこと

娼妓美談 籬の花

鼻山人 著

○

前章は宝晋斎真角が秀句
宇之為寿や梅はさかれどふるうの枝と

本朝文粹巻の九 論文の中ふ古えの人いえることあり
前山の璞美なりといえども瑑ざれば其の器と
なることなし實ある哉蘭姿蕙質傾国の色と
情の仲の町ふもとと云ふ地の天濃人も志業の
不成て走る放蕩の風のまふ〳〵ふ入船のたとへ

あぶで出来と言ぐきぬ〳〵あり殘を命を拔漕
客まち〳〵堂塔の名代鮮妓夜船どくかくらふ
帆柱走て待うびゝ峰木枕の罪るべゝさまび
百姓の樂も一瞬の美の中ゝ止ゞ生涯の望い
四季折〳〵の美景ゝ張る籔の花も散去て
こゝゝ梅川がざゝきあゝ中のゝ女の客ゝ客ゝ色の
移ゝゝゝゝゝゝて大あぐらゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あひらのごんぶろをゝてぐゝ〳〵〳〵〳〵〳〵
梅川かさゝゝ立て大ぜをゝ所をゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
をゝりのゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゆびゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

八

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ぐゝが一すゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
りの出色といゝ色客のあるを知ゝゝゝゝゝゝ
出ゝゝ獄ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

梅

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ぬ〜だつても若衆のことをもつて後くわど没分て
おぜゝあんをうのを一ト番ふるものをくふあるら何も
武ゆ〜ふ手あけてハヤあんせん 図 自惚らしんが業さ
公うらへよりやさ〜おやアあるめ〜トおもつても人の考ふ
梅川と忠兵へハ浮ひ中トつるれて見るト友達のる
まへもめんぢくあく一チをんい計較たのがらちのあや
まるとを切ことろがかんぢんとあきふをてをんとも悪縁
のかあ〜さ水尾も水ぞう歌ゑうと考で考をを

とうとを出〜ていかるゆ〜ゆるゆ〜ぢつる愚ぢ癌ぢ〜
たくあるる 梅 ぢうらしんをれハぬ〜の口つを〜ざんを
武ゆるもいろ〜とことをつけてあつせをうらをやゆ
ぢつることのかのをれるゆ〜ふいさしん毒〜忠兵さん
のるハうあふぢこうあるひあんしとハ雅ふあゆをを
とあらやぢまでふ手あけてゆ中ちんしさぬ〜が今夜
あ知あんをトいあ〜〜ゆ生ちうてあきんし〜〜ト
たうぢくえのうふのをてある西の
うちの紙をおろをと目でちくを 知ある移てるゆをうやうと

いろとあるゆびどもをくるくるとにぎりひねりあげてせんとぶんぶ
八 ちゃうちんをひきもぎりをかくかくがみをかぶれ
あがぶたとがをきて又西の間の紙をひねり〳〵何もかも愚
痴ぶんてやいやあるとまア一ツ呑るすごろく 横 ひきあらうあくのさ
をとりてやく〳〵いろを考へ法まつりふ〳〵さやぐんを一すまつて
あくまあんー 時ときろく〳〵ひをだくとうけてあるちんぞう 里
ものあぐとぶんあんー〳〵とまア〳〵をあけて
モシイあり 祝儀をちろ〳〵とおらーあんーヨ 横 そこれ
あらうあるちあんー 里 そこて横ぐえさんがあこと
づけがあるふーとまつ せんそくのるをとあるぐひや

ちんをウサト いろのぐらまぐらとろて
いろぎ彩りろ〳〵とみそたらとお 万里 ヲット 横ぐこと
さんらあくりのう 里 サアあるんーあんート まぐらぐぐぐぐぐぐる
のさまくらぐぐと
万 又お計元のところくこ蓮華の 俵 ぐやア
彩くか変結いろちぐちぐちぐ

八 ちうちく ある時 会 座敷のまくでうを
たゞ 何ういそぐ〜さう ふと 行くうを ちとゆく
そのうァうちうらうことゞさ 万 ワァさうで
どゞうとまう〜うそれい 怒入まう〜と 尾張丁の
虫だんで 大きふうんまう〜と 附ふあわらんを
の一件 いさまう〜さう 橋 まゞさまんせんその
うで 橋がうんさんもいうそうう ちあんものさ
万 モし 八ちうさうどゞうも 色男いたゞ ふんどゞう

まうよて あまあさあどゞもマァ 用 ゞ 公 あされませ 八 そん
あううァ 美 あゞどチト あやうとてうんゞト 橋 川 ゞ
橋 あうとう ばあばんまョ 八 アタ〜〜 万 それどうし
まう ゞ そうとうゞ 用 公 をするあゞま 八 あきやァゞれ
サァ 一ッ ゞうう〜トちうう〜そうよの ちうくの ゞて ゞを 万 コレハ ありゞたうトうゞき
あわらんのお 扶 とん あるをうとうまゞまんト
うとうる 八 紙 ゞれのあゞどうまう ゞ 分 サァ あさうゞ 万 とんハ
だ〜〜ふの 行 ろて
あのふふ 梳 とさうでどゞうまん トうゞく とうひ 万 ゞのうくあるん

梅川がたのみをふうきゝあり　なるらん　梅がえさんも源さきさん
みやゝこゝろをあさをまつ　梅　女郎　梅　女郎の
たのいさんなあゝきさりんでなんせんをヨ　丙　何ふ
就ても　色男のおそれしぢやゝぜひ　今夜の
うちふぞくとうかゝとおゝ　お云ぶかそうぞべそ
まつまん　梅　それゆくさんきらうびふあとて
あんをそれど　何もうちが　客人を　初とうた
　　客人のせうを　あしいス

五

沢のあざらそんせんうらまざまつうそんせんのサ　八
梅がえさんがぞゝ　梅　うゝでおざらそんとうの　花魁
　　客の客人で源さきさんとゆふ梅がえさんもあま
ようひあんして内　梅　うも　度ゝようぞれて　且那
さんふまでうそ　兄をいうられあんゝとうふあるうん
ざんものサそれふ源さきさんがまとゝうふきふこと
とがあざらそんして　新　造　そんのげ郎川　さんと
うとけがあゝあんをトいうて　安まゝくいうあんゝ

たゝら源さんがかんぢをあくを話しあんしてを
絶句しておもあんもくのサ掛ぐえさんもそれ
ぢやりさくんせんうらあのひやるそつやてつゝ
たところが矢竹玉屋へあんあんして梶のちふ
さんをお買あんもさそけサそこで掛ぐえさんが
ぢけ引のみをあのげあんもト梶ちふさんの
和うら源さんのるハもぢゝ世方へまいで
あんも客人ゆく人まちぐひのよゝふりてその

みを底してあゝあんしたのサそのうすふ
ぢけて掛ぐえさんもあびぶやへだんゝむづゝゝく
おうけ合あんしたらあびぶやのどうさんがうちぐ
あくきあんして掛ぐえさんのうをあさのゝあんし
たとけさトぶつぢゝろまぐ

丙 掛川ぐ

あさあたとゝ モトあうらんそのあとあしをあめくかうで

あさるゝト夜ゞあけまゝとぜ 八 いろゝ夜ゝあれな
一ッ冊ぶりいたらぷゝあるちゝとゝあく行て行を
つけてかるらゝ トいゝもゝまゝもゝあく用をもゝまゝとゝぶつゝりゝ
横 いろゝつらゝあぶゝんもゝトいやゝゝゝ

ちゝ〳〵ト出一きこんをはく〳〵りの
おやこを能まるとゆわらかひ付て手親
父ゝ呑せるト今まで口まれきろて居ゝ
事まそが稲くうんで来てあれが若ひ時ハ
よ〳〵ものも強勢だゝさ俄のときまんゞゆやの
その巻ゞ行ほと股ゝの角力あゞんきゝゞ
洗ある大ゝ家やの白粉ゞ両我の備を出て
仲のゝへ出るト面ゞ摩ゝ吉ゝやの浪花の

唄あやゝさんがの孫ゝもあそれをあ〳〵と
小ゝ物やの里八ゞ三味子といつてなんと称ハ
出さ附ゝいあれも中近江の内で丈色どしと
とんさんのいくなとまんなとまれもトなを
子も親父の事あれがよそのの人の笑ふまくも
ゆんゞく〳〵余ゝ右思義と能去とんで
ゝるト一切さ〳〵合あ〳〵んどうでどゞまきハ
八あゝやゝがれさ〳〵合あ〳〵ありがとく〳〵

[illegible]橋川ハハちやうをうまくなるべてざーまをとゆけ出
ちんぐざーー橋ざとが行ごとろへとろそうといられば橋ざとも
それとちろて橋川をごーぶの中へいれあんぐーをくち
らくいぐーてきぐやとぐをいざーーむぐ去のふくを
らいてゆるそれぐーぶのくちの高ちとうひ橋ざとぐ初舎の
ちうとぐけてよりし橋川ぐが余とあるーんかをくーく

橋 ちぐさぐまちぐーふんしーたらーート後ぎの中へまちり
ちるふ後ぎごをまろぐりうぐる 図 かえまであぐらかどをまひのあり
行くまちぐあの東ハぐ紙のよくくのをんで家も
中後おのつきくまふーてくれふふりぐとあを
ぐちく 橋 橋ざとさんといろるをちていくまを

ちりておちんをらをちをくけをくれーーとらの
ゐをあまけてたのふんしーーのサ 図 ぐーアで橋
ざーもあをちーしくをまひをちをョそれいさーート
まりアふりとちを行りあひふら出ちんふ出ふも
熟ちんさいいちあぐら今をちらかんぐてアれが
アちふかどをちあひ身のくちんとの毒肉い
ちーーーちをよのゆあれば何ちふけて実質ぐら
げちんるんい一日ふあや孫ちんどの方へかく

まて仕ぬとなびくの相法あるくろひとを
不義無で六の時ふらんとけて云月あげさ
ちう
ちう
ちう

てんく後へぬけをその外のうくはちとも
うんまるうちづ彩ふあぎとんを引人て今
さらとがれ彩ぬまでできあるひ切るすいぶつも
できふとんそれおさやうおたなく〳〵お用ゐか
アんをうくうらどの〳〵ひあわとぶいふこと
ぶかぶとふ〳〵とそれきうあぶも有ふ〳〵こうら
まアうの性ふぶ丈ふ本〳〵とあるひまぶも
ぶうつをぶふたくまうをふを式写も東八

ぶんお四流をきく〳〵ぬ〳〵を二階を
さうられ有ん〳〵といふこけぶも有ぶ
とサぬ〳〵のかんぶ本〳〵がさうぶ片ぶつきんぶん
うらをを中の清やへ有後のうくをんふうら
まづまを〳〵でも行のつくまぶとかくふふ
ちくさうけざんをトきのてをうぶ人をちんをぶ
ぶるをぬ〳〵もかいくあんをと東八ぶんのめん
をくくちをうアふをうらふちをあ〳〵を

とらくておいでなんしゝあの小さん ごらのさ
ろうさら十太まんかど来るつのうでおぐるん
きさら来きさら きてぐふ 浅やへあんまんしゝ
ちちゝ でも行ぐ行けば 何もくろゝ さそして
おあぐんあんまをこけもあぐるんせんとそして
りとのさうり 亀や さらありでなんゝ
どらく ハちらつ ごら のすをさぐ なゝして
一ツ 茶屋 みも おあくろんゝ されどもきちん

ぎつねゝふえくるやうな 客人 おぐるん
せんちうとぐもらふきらゝふるすぐねゝの 年
えきさくさうその 時いぐともおてあるまん
あんゝたさくねゝのよかつてあんでもいと
いうせん 公でおぐるんもョ 図 あんわろ二人の
あくまぐらもやくもへも 仲の丁へ出るるアよも
ぐりとうちも 気ぶりかりてさらぐゝ 物
さふさら 仲の丁へ出るるアよもせんョそして

初舟の客人に引しめ別染の客人と
いふちやあの八ちやつぐらぐらまでおぼえん
作者曰掛川が出来ふいろ〳〵ちやあん
ものがたりこれまでの通なふいくらも
あやまてめづらしくらゐがたがあるまえ
神をちやを式ふ二歩ひふあるひとおと
をもものやきせいとるふたぐまでおふの新
をまちでぬまた又まるまで試あるりで待て

十三

ぬ
乗ふとゆくふたぐまでおふの夜茶を
あるあからかぶうめ〳〵給人売ふまで新
をうんせまで横がいるといふを屋を屋
引ひてくかうぐるもあまでこんどの食
事もふまでたぐ客のうのくあるを
寝て待て乗るの新ひあるひれ又ふ〳〵
あるものをかくらぐるてそれをかき出して
咎せるふきたあると思ふぐらくちんどがぐ

ある中ゝあるとつゝぶ家をたゝき
あるごちとあるあそるべ〳〵〳〵
梅 いつそあいごうら風ぶ送ゝてさゝやうて
あゝたゝせんトたゞきをどうて
ひりたりよる 出 ぞつもこれぶいん
ぐゝぐゝ成しとき小ゝ中の ゆきぐゝくあて 梅 そんあふ
ひゝしし本カチ〳〵
あさの晩ゝうあふぶ 梅 きうふ きうでも来てあゝん
あんし〳〵 出 第えつぶゝ 梅 ぞゝくぶかれのよく
ゝうをあゝつけて いつそ
とゝとゝあれとゆゝぶかあきゝあぶゝんまト

ぶゝうゝとゝぶとゝとゝぶのあゝぶ
あゝゝゝくがかゝゝふあちて見ひをまた 出 ぶちをいゝゝぞゝと
ゝあゝ行てかんぞんのりをとゝをゝぶされ
ゆゝふまるがいゝ 梅 ゝあふぶあんぶあゝゝん
ゝあふあゝのぞんいきゝト 出 ゝんあゝうそのゝ
で 梅 かゝしまできんゝとゝぶゝをあけていで 梅 ぶゝとゝさん
いまれいゝさゝふせんヨ 里 ぞゝゝゝゝゝあぶゝゝん
まトせゝじをあけてえあゝあぶゝゝゝく行
火ゝゝ火をいれてゝゝち来ゝぶゝをあけて 大方きゝイ
ゝゝゝゝサアたぞゝをあゝんあんし〳〵 出 ありぶ

てくてくかくし揚ざとときんかめくいまごさーも
いくやくぐ式ゆうふ紙をひをきてちんーどつれ
ありつてくんなさるところいきぐ涙のこぐれる
ゆどかくんさくーざョ里さくーおりつておくんあん
せびあせをいさくーふちくんがあぶんーとくれ
まくーあぶくふも忍二くんでもあいて歩くゆくふ
あいさくきつトあまきくんいまくんぜ里ぐつぞあさの
みゆあんをいく富人をひとつ捨れてまたこ

十二

あくんあんくー忍をゆやアいくぞとものとあきく
ゆくをふ里ぐふあんまくく忍りくけくいあを里で
からくふまぐをゆくあぶくふを八ま忍をあく
絵くと肉のほぐくも悪くく人目あぐもかくん
ちやア揚川まぐがあんぎあるおやくまでも
くさぐられとをきも絵くるぐ里それでもあ
まくをゆくあぶくふを忍ハテあれがつゆふこと
いくを絵くトびきんあてくをきりあくくを
をふゆちをぐをあくく若

ゑきこのをゆとこちやてゑてゑをゑをゑ
きるとれくふふごごくをさとられぬちち 里 あさらび
よとこいふをきろゆふ 六 ごごもの そしそくいごく たりいきをわとつく 七の ひやし木 チョこく
とれ六ちくがめ牛あきちちふて出物
ざとゑひ赤ふ八といろるの紙をきく
しゆくいざとゑあくとをを出えてをのぬけ
がとのあとく色男をいれさせんをふひ
ありとらがりのををとをぶして人をよろ
とごせる仏いきあるぐし

物 ざしきくをらく 方やまがあをを ヤやまざあんでなんしさうく 万
おゆくんのおうくをまでトついあげをあしふあり
ましと時ふああ紙ありれどふでとざりまを
物 あらかさをふししヨ 万 をれれあゆでさう
どざりまを をんあらひてもちるつと物
ぐくさんのふく トををるを 出 持ふ紙ようふトををく ふひをる
ぐひしをちいぐるを物川ふたのまをて
ざしきのありをゆるちちあとざををあさのも 八 ア大ふ酔
たちと森ゆりト ぬぎを よ 引ぬぎを ク ける 物 ゆ紙ゆしやるゆア

あかんせん あらわど酒をあかんあんを
あとヤ あんをふいろでもおきくあんせんヨ
頭痛がいるあんまをくりんでおあけヤ
あんあかく 八 あかふいくまあんざらいりそ
目ゲあくぶくあくさあくぶ 拇 ぎと一ッぺんで
かふあんを ちくぶくらさくで あぶ あくん
せくげられらくさがりんぶとぶとあくりて
あくんあんくトはくえのくふあきくあの内の紙を
中

引出くあかくそんくをいぶくくはそろが目のまくくて
くまくりのびのはふのあをあのひきんてきくり血の
ぶくくあちるをぶふちくとの中くうけてきせくをを
あくくこれを血ぎせくとくいく又墨ちあてきくけ
はあくれがあのくくくあくへ血をつるあくり又牛王のくへく
あくくくまくれ名のくくくあのくくくくと引くくくの目のくくくく
くぐく血をつくるくくあもきくもくんのくりくき
出くくれくりくあくくくく

[illegible]の山潟あるべし 梅川がはの

きせうもさぞうてゆ なろうとあさくあし

ふらさびあり 八 [illegible]

梅 [illegible]ふいらぬとものぞ [illegible]

八 [illegible]ふこれぞ何もかもうさ節なもあれが

仕業はりれ麦金へさいらてれをうけ

さもやう又十八友の今のあしさ八ツ時くまで

ふいりて来てあるうら まうてあるがう 梅 [illegible]の中へ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

まの皮も薄くへべ憂き身を
今さらいつも愚痴あれど嬉しんいとし
さのをどりまれてくいまくあくぬのあくあ
待つ身あるやそそ夏ざんト 後ゝあきさる梅川
がざきみれまんぞう
梅ちるそゝじだんの売ゐさしてあめくんのたゝぐとぶん
やゆのやうをろうやてゆるしゝゝくきゝせんぞんゐあくろさちん
ぞう 左衛門 モシイ 梅ちるさん タアのさゝせんだんい
だれぞのゝ 与 たゝうあーかのさんだうけ 左衛 又こゐ
ぐあぎこやんせん 与 あきれもちあく 出 ぐもちろ

十九

らんイ ちさよりゝ今月も七ッわど 待つそゝんん
ちさけーかゝあくあーかのさんをあやあんし
トゝゝへもぐきをひくさゝせんゝ糸とゐゐ水肉せくゐ
うりるゆくりーあくまを附いるのだんのちんぞくゝかゝきき
まそそ出きゐゐみゝ肉せゝくさゝいゐてうけるゐせ後ばゐゐ
よゐて次のだんへあくゝしゐくくそゐくてゐさーたイヤぐけ
くゝぬとゝゝゝゝろん附くくあるゐ又赤くゝみゐゐて
まぐくきのひきゐゝまーづちぐゝあゐ二上り三下り
なてゝーあゐてテンテくゝゝくくトひき出を肉あゐ又
あくゐゐゐうチヤゐくくくくトゴンくくトひくゐ赤ありゐくく
きをとゐけてゐゐぐーー
引ゐゐゐて中のちゐやの女ぐゝ 女神 夏さんあくゐゐ
あゐ身ぐまゐんぐ出来まーくくゐ 与 たゐくさ今ゐざんス

お仲 おめ〳〵んへお湯でござりまする 客 分ざまん
でおざりんをヨ お仲 さてもさうまーたぐんさう
ハちらうさるがいらちあつてぜひこちらへよんでくれ
ろとあつちあるゆへあちらせヤあぐらあるうひふ
まつりまして是なるの事でもござりまそれば
どうぞいらつしあるやうふ 客 さうヤちんまあ
まア一ぱいあんしーとたまごをまぜて出せ お仲 ハイありが
さうのおぐらあまくのお客様もくハちらう

さうんぐはれてお知あんしーさヨ 客 アノ奴さんく
お仲 さあうサ 客 いやごのくハいつそきんさうざヨ
お仲 るのふらあるやくらんおやアどざアませんう
客 どうあうざんをそれようやア出ちやくざんの
はれて来てあうんあんしーさ里風さんの方ぶ
ちくぐるれイちさヨ お仲 ホの客人ハあん
とくの島子様ら〳〵どざりまする 客 もち
りのヤ何やかぐいうそいきでおぐざまるをよ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いりてあそんあんし　右　そんはちまつとても
あるもあんせどいそぎ行くかの　まつりもおざやんをもら
梅　さそいあるりてねつまをびひろつと仲の丁へ出さ
と思ふそくさんふちれィちそら　ぞふをんせそう　右
おそらくしんそれもかんぞうやそくさんの　たそん
ざんをりの　をたそくあちれィちてもちらをたもり
あんを　ふもあざまんをめく　梅　そんあらちまアーす
でもやくまんせそうトいそくそくそくあるんぞんそれよんぞうあきあるり

梅　あるいは梅川がみずからそこらおかるる友つまをとらくそこら
そんてあるそきそ一茶をかつてとんをとるあるりあるり
中くへあつまをたてふのるさて座中ちて茶屋へまり
まるる時さそ一あびをそんおくそうちんぞうそれをちあるり
ちて皆ふけーてそれせぬちりそのちおくそんそれとつれそて
茶やをを出るふ来る時の出るうふあづまをそうつてそうく
あくひとりもあーくそふちまあつまのをーをむづとつうんで行
又座中ちて皆のおるふ出る時よそのの茶やのまくをそうそと
そけらるくるのあり此時ハその茶やのまくをそうそと座り
生ぞーをアイトそうおのそんトをまるりくそをそを
られてさぐふうりあくそきそをさらづけてアートーと
いくそれかくのへよふそうふとそうあり
梅川　梅ざとうもろ梅二つそぎ中の湯やへ
いるそれ一すちまて出ふ屋へ　梅何あり

[梅] 宇の[illegible]やへあぐらんとさる時
[illegible]さの[illegible]ろどの[illegible]かとんでゐる [四] 梅川がなぶ
さをつうんで ぶふん
ぢやとも トうちいせるかんぢ
折てなちへとび ちる [五] アレ出ようざんぢト
そのひわりをぢて [六] うんで出さんとれびぢゝ
とある[illegible]やのてい[illegible]や
ものてどぢゝまれ ト[illegible]を引ちて
[お仲] あるのぢゝ梅川が
ゆをとりていそぎ
二ちい[illegible]あるきゝふ男れいつけて饗宴をようひふるあり
[illegible]ハ梅二れいつけてあぬふんのう ぢゝとさうふる
此時ハ無あハ[illegible]
わらしが梅川がおそへふぶられさうをとてうんと
せきゝゝゝしぶめんさゝ
ぢちらんうをあて
[illegible]
[illegible] [八] お仲 ぢゝ今の 雷ハようぶどひうりぶ

[illegible]
[illegible]さの [お仲] 梅ぢゝ
[illegible]モシ梅ちんとい[illegible]のアこうんでぢゝ
まれヨ [五] そこでこんちが梅らんうう [あまう]
あるかど子トいふおうらうぢふや革吉ひで次ない
[illegible]方里きゝゝゝきゝふふきあふふ
種ゝの 滑稽 あれども 梅川の 混雑
[右] これありがんゝ 伏のある事あれいぶまこ
ぢんまでふハ事てヨけをけやせう [六]

あらうさうあさされてくぶさうませさあうおい
ざうまぜんトハちうさあの茶へたんしとめれ
ちぐ世話のごくでござまし 出 うちも
男ごヨトいうとうとれ梅川う仲の丁へ出ざる紙
生を遣しく 恐ちうう疑心暗鬼を生ずる
どい長し非もあしく
出 ちうとふこうれ主はハとつれ主はうハとんまう おてまうく
四ふうとうあざしきあげやあて大ぶれゆくちふうるる
ちうでまう ハちうさあ一つてうぶいうとうまうう

八 サうく まうてあさ 下さうぶきを ぶはとき梅川が
繁もでまてちうもうちうぶ
お仲 ハちうさあちとあ二情 ぶれハどうでござ
ぶまうハ 万 きちうく ざま 四 二ぶでニぶとまある
ざいく 万 ぶうもきちうでござうまぶまトだく
あざうちうどをどうまでニぶあうたうさま
ふうて梅川まうん どうまでニぶあうたうさま
とまうく二ちうく上うあまれとある梅川ものうまうぶを
ハちうもあう川がふうさうりをうきたるかうまあうぶ
万 きうをチトかぶうふのまれうてあちんの
あうせうきへあくまうせうおやあ ぶうまう

せんう 苦く それがよろ〳〵
二ふのさいぐさ まづまくとあり
是より八ちをさくる 主人亟梅川
梅ちる梅二げんちや 菅吉ひで沢 玉屋
義ひ茶 東八ちやのお仲 ごまもつき
そひかゝり〳〵のちやれあつて梅川が
茶へ ちるはうその道ゑ くるーくちるも
くり〳〵ちれば先を ちつぎて 略を
万 ぎちぎそれく のぶせられませ〳〵 業 ちらぶ

ぎやんとさそ 亟 ちゝふ中ちとんざもうきん
の 万 イへ 新れうくゝひがどつるあきくちあき
あんとちうきそ ちるん 業 ヲヤどせ〳〵 ごミト 梅川が
ぎゝきへ ちるを ゆゝくちるハ ゆめんあ大あごら
ひきそ ふ亟ちそ〳〵そげを 梅川 梅ちるトちふげて
又ちさらぎと大ちるあいく うんとかと 出をあいあり
あさちへ ありあるひざ あるもとてしのちりめあ
白ぎとんあり きろ絵ちんあり テトテレく チリテウトシ
のつるぎれのかんしんの八ちろぎうちぎるふきりあげを
万 ちさ なぎ ちつ ちそ ゆ ぎと ふふぬ ちれの
新ちんをや 中暑せんちゝぞんぜんぞんく

ぜんとゆくふとをいきひあさむ 丞 あ〜〜〜
〜〜〜 れうらあ八
ろうあを五 万 ちっと 家ぞ ちのくどき
めうぐ子 ぐ〜〜 きく まぐ 年月の 〜〜 武
ゆ〜〜〜〜〜をまづ 行ぼけあまのと いく あや
まき年 東 かとまうまし 右仲 妻さんの あい
いうもの八 ぐ〜〜 東 さあうでぐうまん 筆
ひぐ 八さんゆ〜〜づふいうあまきせんく 八
いきたらうとさうきうく てみとひうく
二十六

万 〜〜さあうあうふ 役面をうくうよせ
まうせ〜〜うトひを 引 八 ア〜〜〜〜〜〜
からうあ〜ぐ〜〜ぐ 万 きあ〜〜をぐうまぐト
〜〜〜〜〜〜

いくらかけうちあふせんがあのそうりの仕事
うまくぬねーのお親のたぐうるやうなもの
ハいさーふせんうらさうあるんてきぐんを
しとあくんあし 八 そらの立のたくねのと云ハ
さくあるす 仲のTのまん中で横川ぐ出
多くふぐさんさを八ちつぐ茶金不乗あぐら
人もあそあさトうさきさんぐふもとの
うくくくはら 出ーぐあふねあの時出えくと

いきぐをみぐく事もあつて乗れどあん
あくうみうくいくきあうげんぐーてあつて
まんなぐ和をかくせらるるトるくを
あうさふロ出あもできぐとうてまけあー
みふ茶盆うらまぐふくくくるもあふいさ
ぐさくくのくくの仕事ありぐてくどんせん
一生 ひとれハあやせん 横 ねーのあいてあんさん
くくあうとるさんをぐ出えくさんのるれ

いま
今ゝトまんをそろ〳〵酒をのこまんを
さんでもぶちあんしたりまんぞう元でも
いぶりあんしたりあさぢえんをゆくやりさえも
ふせうつでゝけぶちもあつてい間まをうく
をそこんせんトまあ盃でも引二ふもとあらあを
めあんをそけきたそ方そんあるをを招ぶお
うんてのしち仕方でもあぶちんせうぞあうそけぶ
をそちんせん 八 ひとりといふりのアぶでも

はきをそひりのでまんぞう酒計おさあをう
で行ふうふくをふ行くよんびをえい酒の
うくぶあひあもあるふぞんぶんをるをを
あてんもそれをうぶうちの角のえいぶうら
ぶう不獣子いをそトぶんくをあうぶからんでをそ
せうくのあまんもあぶうあるふび掛川ハをぞたの
のぶふとんをさぶあべうぶのそをく出てきをうぶれの
引出ふう髪をうを出ふ山のつぶを行ひとあ
ぶうはうときりあをふふ山のくをうぶをうあるも
いをそをふ
あのびあき 八 掛川かけこのぶん
るをあをびをうを 八 あをあへをふふのぶ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

さんいろまてこんてもそんくぐんうまて
ゆのこーまくさ蓮ゑを入るかう
さんぐう鹿ゑをもらう行くの色るのあら
る拵ひうちゆ擦を拵をまるせく貴ぐらこ
あでもあると一生もの あるみあるで 図
あるんーあんをるうちがようまあやア
だれもあれてぐあざるふせん 図 拵れくん
あるめくぶあくのあるうらあるのぐうら

書うさう行くは出るまで揃をあさきの
蓋で天平一ッ毎用といかんざーめ入く
行くの色男ゆ借うられとうばとそくうるさきと
図 ばとあんとあんとまくめーのあうを中あ
拵の行く宮くいうちぐがようまたうゆ
ちゑのあんぐをを買あんーちやアぐく
でおあゆやいう行くのサいたとぐたるくと 図
きゆさうをいあんあよ上ケ 拵の下ホ

[illegible]の出てある仕[illegible]をそろうちやアどく
で[illegible]ぜくろくふをいまるとおひおせく
[illegible]ぶの姪[illegible]をえるやうふまも
[illegible]く方のあろうめくご
[illegible]ひちんをくふかあふる
[illegible]ぐろうふーん　[illegible]の
[illegible]の[illegible]ぐ[illegible]ぐ[illegible]ざろうあるな
[illegible]のヨ[illegible]ちんあらぬーア[illegible]で[illegible]

[illegible]

あんたのえ[illegible]ろ行くあのうくさ行く　[illegible]
[illegible]ろく行くうをいつあんナかろで来る
[illegible]人があれでとそをく方のやうあるのも
[illegible]ア[illegible]和ふまでぢろ行くのぐ心[illegible]
出を[illegible]人がおやくごの歯ふろうのう
[illegible]やアあよせんあるびね[illegible]ごョトゑべくて[illegible]
[illegible]を
[illegible]ごとのえ　[illegible]里　[illegible]ろるきんへちうウト　[illegible]樹　ごと
さんあ[illegible]あんしート出て行あとふふ[illegible]ひとり[illegible]
[illegible]びの行るあも行ら[illegible]ごの中

[illegible]

[illegible]

[illegible]

置山の翁がそのむかし詠まひし
夜乙姫を妻の夕暮い入相の鐘ふ
若やさくらんとの香ふ風とうれ
人右往左往の其中ふ木の葉金ののふれん
をくぐりてまイ来のい
久〜ぶりであそろしく義岳がたくよト上る
[図]
[東伸] ヨヤ出えくさんいふらん寄りませ [図] 大スハ留
ちかの [東伸] パイたで今二ま場までまりまさ
[図] 付ふお仲ぐ〜今夜事されかの幸ぐ後へ

とんまで脱〜ふ義理ふちとうちの動
[図] ちとばく〜を行きとおりとおりて松合
ちと場下金まアとれをとりて出てくんなト
ぐうきうきうきうぐうを中前で [お仲] ちてくうりうぐうて寄りが
十ぐ〜とうきまをお仲ふ中ぐ
とんどぐりまを左ぐ今宿でくうまりくまで
お行ぐ中まるトうんとの方をおちて かきうぐきをとをく [図]
パイトちしまぐらぐさ [東伸] おくしぐり一ッ中こうまを
ものまのぐうぐ
[図] いらさ夜一ッ呑や中ト場をのとぐかるなど寄く大安
主ぐうるなぐこうて中ちをく

かんぢゃのようをいろて十五の今をけをたべ大変くみだらてあん
ぞくのようをたべてあふさとあまりまぐと饗へあるとり肉をとうへんを
因 とれいかんえんさ夜 冷てかいありがたく 因 か
しぞうでまの毒あがらあるとうとけと 因
イエ大ふありがさんどぞうまも 因 まざひとう
いろみ 毒 をまあるかありかを色の橋川が
ろえん
一件サようく考てろるとんちの肉へたん
まとも毒のどく子万橋川がやへるちんだく
あさふどうであまふて浜らくとあるへとも

さくまとうて動変の引あひが浜ぬらちい
まづ二階をとあられさといへ浜でへあるれど
ろんとよまてられうと玉極ろうとをたの
みふようくと工面まて来さ今夜の十五日
絵ちくいまめくられどまとくでも義理がさど
けびすアれ浜もできようというものか仲ぢう
さうぢゃアあるめえう 因 をやアあんまらぢと
あろうめえでどぞうまく 因 いづれもちろと

みけちを合てやくうまやせう

【内】かゝとまりまゝ

【有】せいくとつくあぐらうちかくさんようあいでゝあん

【内】ぜんいそげさまのひが

【有】とうとひぎのたぐくうくせう行くトあをたゝきまやくあぐら

【お仲】ゆきくさん

【内】あをゆんをようふあぬぐんがトおひをさゝる

【内】いうきゆかゝりあうちやあ豊ともうやく

【お仲】ちやくさあうりあうちやあせんく

【有】サアおをあんゝ

ちんををけあよ

【男】ハイ〳〵

【お仲】さまうのゞ男ふちうモレあゝきゆのいとちらふ

ちんをきけさせて

【内】タイ

【内】ゆくゞゑのの内ハくふ梅川ゞ髪を

切て小ちうふあうる事をゝやくうちうて

かくゝゝふひゝゝあうあゝて如くふ物らゝ

時い系事沖ぜんあくさきの公のうち

をゝゝぜんふ掃〳〵ゝ抜されば眞のいろ

客といゝがゝ〳〵ちふの公をさうくゝ

抜きて色るゞ仕ゞみのよくぞふあゝを俤

ありと云はるるハ大きなるうねぢれあり

【右】さきへ入りて梅川わらくとつぶやく【出】ゆうくさそどをとる

【東】さきへ入て梅川がぎーきくあんちのきる【右仲】おぐうんの

さきこのをさまうーて

あとちりあるぐく歩る【東】よくいらんちゃやまーと

【出】久ーぶりごの【右】お茶をおあんちゃんートらくきの

ちゃうへくをちゃをたて【出】うくきをとりてひざのいきくあきちゃをのむ おくりのあと

ちゃぶくきのよくのをて出

そうり物ーあるる梅川へ八ちうがねりし紙

あて髪ゆひをよびへ入髪ーてもとのとうそ

ゆひ直ーうんべかーも切ーゆうまへうくぬるり

【梅】久ーぶりでおさうをトそぐくようてきうり

とうてのまうぎふ【右】

ちくくちうて 【東】八をようんでくうちや【梅二】アイトうり

ちをうくあぐら来る【出】久ーぶりさ一ツやろくトさうぐきをちゆけてあり

まげぢーをぬぐとつくぐびとぬけへ

ちくちうへ髪ゆまうぢりと立て梅川ぐ

【出】ひつくり【右】こし

【東】八梅川へ比ちうり髪を切てみるぐこれまで

おうくーち ちうさをされさ比出ちくく梅川ぐ色客

だあぐ身ふ見えもれ

動客あひのふ義理より二ふへもあぐられね

[illegible]

[illegible]

[illegible]

籬の花後編

廓宇久為寿

来寅の春出板

和しや
ほひ多きと
るつぶし

むり川

源井

廓宇久為寿